

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2019年3月1日発行
発行者 本多弘之
編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901
e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>
Facebook http://facebook.com/shinran_bc
Twitter https://twitter.com/shinran_bc

2019.3
第68号

教えの伝承 —第一結集について思うこと—

親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰

仏説が伝承されてきたことの意味を少し考えてみたい。中国では「高僧伝」と題される仏教史書が出現し、その編纂者たちは、仏法を伝えた訳経僧の伝記をその初めに置いた。命がけで険しい道のを越えて仏典を伝える人がいて、それを漢語に翻訳した人たちがいた。この功績によってこそ中国に仏教があることを示したものである。

振り返れば、釈尊の教えは「第一結集」を経て伝わったとされる。釈尊入滅の後、王舎城に500人の阿羅漢たちが集まり、40余年にわたって説かれた法と律とがここで確認された。釈尊がいなくなって自由になれたというある比丘の発言を聞いて、教説の雲散霧消を避けるべく、この結集を主催した人物が摩訶迦葉である。

釈尊が入滅される時、摩訶迦葉は釈尊入滅の地クシナーラーに向かっていた。その途中で一人の行者から釈尊が7日前に亡くなったことを知らされる。一方、ちょうどそのころクシナーラーでは、マッラ族の人たちが釈尊のご遺体を火葬しようとしたところ、神々が風を吹かせて火を点けることができなかつたと伝えられている。その理由は、神々の意向が〔彼らとは〕異なっているからだという（以上、中村元訳『ブッダ最後の旅』〈岩波文庫〉を参照）。摩訶迦葉が到着して釈尊の足を礼拝するまで、荼毘に付してはならないという

ことか。いずれにしても、舍利弗・目連が釈尊より先に世を去ったこの時点で、仏滅後のサンガが摩訶迦葉の存在なくしては語れないことを暗に意味しているようにも思う。

ところで数年前、脚本家などで知られる三谷幸喜氏が『清須会議』（幻冬舎、2012）という作品を上梓し、その後に映画化（2013）されたことがあった。1582年、天下統一を目前とした織田信長が明智光秀の襲撃にあって自害した「本能寺の変」の後、信長公ゆかりの清須において、織田家の重臣が集まって開催された会議（「清須（州）会議」）がその後の天下の動向を決したという点に三谷氏の着眼がある。会議が歴史を動かすという点に、なにかと似ているなど感じるがあった。

話を元に戻すと、仏教サンガの会議をまとめた摩訶迦葉とは一体何者なのか。結集とは単に教えが唱えられただけではない。それがサンガの総意として承認されなければ仏説として確定されなかつたであろう。「このように私は聞きました」といっても、500人もいる大規模な会議がスムーズに行われたのだろうか、などなど。多くの謎をはらみながらも、こうした経緯は仏教の方向性を決定づけたことと思われる。そして後に、「如是我聞」から開始される大乘の経典が成立し伝承されていくのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④7

別離久しく長し

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第116回から118回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第114回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■「会い見ること期なし」

「窈窈冥冥として別離久しく長し」（『真宗聖典』60頁、東本願寺出版）。「窈」ようというのは、かすかである。「冥」めいは暗いという意味です。光が入らないような状態で、ほとんど眼のはたらきが役に立たないような在り方。こういう字を重ねて、我々が過去のこと、未来のことを見通そうとするときに、ほとんどわからないのだと。そういう在り方の中で、「別離久しく長し」。人と人との間柄は、ちょっと現在だけ親しくしていたり、あるいは過去からずっと一緒に生きてきたというような感覚がある。そういう中で亡くなっていった場合、どこへ行ったのかわからない。「道路同じからずして会い見ること期なし」（同上）。一緒に生きているように見えるけれども、ちがう道を歩いている。だから、いつになったら会えるのか。「甚だかた難し、甚だあ難し。また相値うことを得んや」（同上）。たとえ会ったとしても、もう一度会うことはほとんどできないと。

■本当に生きた人に遇いたい

私どもはこうして生きているけれど、生きてい

ることの意味、生きることの本当の喜びを求める。本当に自分で自分に納得できるようなものに出遇うとはどういうことなのかと。こういうときに、やはり我々が求めるのは、本当に生きた人がいたら、その人に遇いたいと。人間は、本当に生きることを教えてくれる生きざまをする人を求めているのだと思うのです。

そうした不思議な思いを私も青年期にもって、本当にそういう人がいるのだろうかと求めてみたけれども、それが見えない。本当に生きるということを生きている人が見えない。そういう思いがあって、結局、仏陀というような理想像がもしあって、それを本当に求めて生きている人がいるならという思いで京都へ行ったのです。今ごろになって、ああ、そういう要求があって行ったのかと思うのですけれども。

そうして出遇うことができた。出遇うことができたその人は、実は、本当に仏道を求めて生きた人を求めた人であった。その人がまた先に求めた人をモデルとして生きようとして、それがまた次々に人を呼び寄せて、人を生み出してくる。

それは結局、人を求めるように見えるけれど、人ではなくて、人を生かしている真理性、「ダルマ」と言われる法があって、その法を求めて、法を生きようとする。つまり、本当の命を与えてくれるものを求める。そういうことが人間として生きるということには常に与えられているのかなと思うのです。人間を超えたものがあって、それを信ずる。

けれども、実際は、例えばキリスト教であれば、イエスという人が現れて、教学ができるけれども、

親鸞仏教センターの動き

(2018年11月～2019年1月) 一抄一

そのイエス像を求める。そういうことが生きたキリスト教を常に新しく新しく生かしている。仏教であれば、お釈迦さまが苦悩して求めた、その姿を求める。お釈迦さま自身が人に依るな、法を生きよと、こう遺言したと言われている。しかし法、ダルマを求めると言うけれど、ダルマそのものは、そのダルマと称される真理性を信じてそれを生きた人を通してはたらく。本当にこの窈窈冥冥として何も見えない命を生きているにもかかわらず、そういう命を共に生きている中に、真理を求めて歩んだ人が灯火のように現れる。あとから行く者は、そういう者との出遇いを深く求めて歩んで行く。こういうことが説得力をもって教えとなり経典ともなり、そして新しく人を生みだしてくるのではないかと思うのです。

■「何ぞ衆事を棄てざらん」

ですから、「何ぞ衆事を棄てざらん」(同上)と。人間がこの世を生きているときには、何を生きているかわからないけれど、とにかくその場で興味を引かれるものに夢中になってしまう。そういうことが「衆事」という言葉で言われてくるのでしよう。命が生きているということは、状況と共に生きていますから、その状況に埋没して状況によって動かされて生きてしまう。そういう在り方が「窈窈冥冥」という在り方になっているわけです。結局、何を生きてきたのかわからない。これから先もどうなっていくのかわからない。そういう在り方に対して、なぜそういう在り方を脱出しようと思わないのかと、こういう呼びかけです。

『無量寿経』のこのいわゆる「三毒段」に入ってから文章は、この世の在り方、人間が迷い苦しむ、そして苦悩の命を増幅していくことを描いているけれども、その中に何か求めざるを得ないのだということを教えようとしている。こういうことがうかがわれます。

(文責：親鸞仏教センター)

■2018年

- 11/2 龍谷大学アジア仏教文化研究センター2018年度国際ワークショップ「日本仏教と西洋/世界の19世紀」(京都市・龍谷大学):長谷川研究員発表「受容と抵抗—井上円了と欧米の東洋学・仏教学—」
- 11/6 第116回(通算第167回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/9 ご命日のつどい
- 11/12 第194回清沢満之研究会
- 11/16 第8回(通算56回)『尊号真像銘文』研究会
- 11/19 第18回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 11/20 第218回英訳『教行信証』研究会「『教行信証』「証巻」における法身の「意志」問題——鈴木大拙の解釈を中心に——」早稲田大学大学院非常勤講師・大正大学非常勤講師:ステファン P. グレイス氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 11/27 御正忌報恩講讃仰講演会(しんらん交流館)講師:本多所長
- 11/30 第31回「『教行信証』と善導」研究会・第9回(通算57回)『尊号真像銘文』研究会(合同開催)「鎌倉仏家の注釈活動—親鸞遺文を通して—」東京女子大学名誉教授:金子彰氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/3 第219回英訳『教行信証』研究会
- 12/4 第19回「三宝としてのサンガ論」研究会
第117回(通算第168回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/6 第14回研究員と学ぶ公開講座「仏法が伝承される歴史空間—第一結集と『大智度論』—」担当:戸次研究員①12/6②12/13③12/20④12/27
- 12/8 井上円了研究センター第1回合宿研究会(熱海市・東洋大学熱海研究センター):長谷川研究員発表「井上円了と清沢満之における欧米の仏教学・東洋学の受容」
- 12/14 ご命日のつどい・親鸞仏教センター報恩講
- 12/16 吉田久一基金研究プロジェクト「仏教思想を中心とした日本近代思想史の再考」第7回研究会(京都市:日独文化研究所):長谷川研究員発表「『大乘』仏教の哲学的再構築—近代仏教における井上円了の位置づけ—」
- 12/17 第32回「『教行信証』と善導」研究会
- 12/18 第195回清沢満之研究会
- 12/25 第10回『尊号真像銘文』研究会
- 12/26 山陽教区聖教学習会(姫路船場別院)講師:戸次研究員

■2019年

- 1/9 第118回(通算第169回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/10 第14回研究員と学ぶ公開講座「教育者としての井上円了・清沢満之」担当:長谷川研究員①1/10②1/17③1/24④1/31
- 1/11 ご命日のつどい
近現代『教行信証』研究検証プロジェクト「真宗学の〈解釈と方法〉をめぐる課題」龍谷大学教授:杉岡孝紀氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/21 第33回「『教行信証』と善導」研究会
- 1/22 第20回「三宝としてのサンガ論」研究会「ジャイナ教の信仰と生活」東京大学大学院助教:河崎豊氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/23 第220回英訳『教行信証』研究会
- 1/28 第11回『尊号真像銘文』研究会
- 1/29 第196回清沢満之研究会

本研究会では「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起していただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第60回

21世紀の贈与論

平川 克美氏



2018年10月16日、立教大学客員教授で隣町珈琲代表の平川克美氏を迎えて「21世紀の贈与論」というテーマでご講演をいただいた。平川先生は、日本人が初めて経験する人口減少という現在の局面を移行期ととらえ、長期的に安定的な定常状態まで生活様式を変えていくことが必要だとしている。今回は「贈与」ということをキーワードに、どのような方向で社会のシステムを変えていけばよいのかをお話しいただいた。ここにその一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 大谷 一郎)

■時代の現状認識

超長期的な人口推移のグラフを見てみると、鎌倉時代には、大体、750万人程度だった人口が徐々に増えてきて、江戸時代に3,000万人ぐらいいなり、江戸幕府が崩壊してから急激に上昇カーブを描いて、1億3,000万人までいき、そこから今度はまた急激に人口が減り始めています。

私たちは歴史上初めてのフェーズを今、生きようとしているのです。このことに驚くべきなのです。これは、人口が減っていくということに対して、我々の祖先の知識の蓄積がほとんど役に立たないということの意味します。誰も考えたことがないような問題に直面しているときに、私たちは、どういう知性をはたらかせなくてはいけないかという問題なのです。

■株式会社というシステムの終焉^{しゅうえん}

現代は、物をたくさんつくり、それをマーケットで売り、それによって文明を発展させていくという社会です。この社会でそれをけん引しているの

平川 克美 (ひらかわ かつみ) 氏

隣町珈琲代表／立教大学客員教授

1950年東京生まれ。合名会社隣町珈琲代表、立教大学客員教授、ラジオデイズ特別顧問。

早稲田大学理工学部機械工学科卒業後、内田樹氏らと翻訳を主業務とするアーバン・トラストレーションを設立。1999年、シリコンバレーのBusiness Cafe Inc.の設立に参加。

主な著書は『移行的乱世の思考—誰も経験したことがない時代をどう生きるか』(PHP研究所)、『小商いのすすめ』(ミシマ社)、『俺に似たひと』(医学書院)、『株式会社という病』(文藝春秋)、『移行期的混乱—経済成長神話の終わり』(筑摩書房)など。

これまで、親鸞仏教センターには、第43回「現代と親鸞の研究会」(2013年1月22日)、第11回「親鸞仏教センターのつどい」(2014年4月25日)にご出講をいただいている(内容は『現代と親鸞』第27号(2013年12月号)、『現代と親鸞』第30号(2015年6月号)に収録)。また、『アンジャリ』第22号(2011年12月号)にご執筆をいただいている。

は株式会社というシステムなのです。株式会社というのは何かというと、資本と経営の分離、つまり、お金を会社とは関係のない人たちから集める仕組みです。なぜ会社とは関係のない人からお金を集めるのかというと、自前では調達不可能な大量のお金を集める必要があるからです。株式会社は、歴史的にみると、大航海時代や産業革命のように社会が人口増大局面になり、マーケットもものすごい勢いで拡大していくという右肩上がりの局面で生まれ、拡大してきました。それが、人口減少局面に入り、経済成長が見込めなくなった今、こ

こで初めて終わったのです。経済成長が終わるということは、右肩上がりのパラダイムの大本が変わるわけですから、これから考えるべきことは、どうしたら経済成長しなくてもやっていけるかということなのです。それを考えているときに、ある書物に出会うわけです。

■「楢円幻想」との出会い

花田清輝という人が書いた『楢円幻想』^{だえん}という本をあらためてひもといてみました。花田は、きょう冒頭で話した、誰も考えていなかったような課題に直面したときに、我々はどうのように問題を設定したらいいのかということ深く考えた人です。彼はこの楢円幻想論で何を書いたかという、ルネサンスというものについて書いたのです。ルネサンスは再生と訳します。再生というからには、死がある。死があるというからには、再生する前に生きていたものがあるだろう。つまり、ルネサンスは何か死んでそれが再生されたのだと、そのルネサンス以前のものが、実は再生されたものの中に全部入っているのだという考え方です。

どういうことかという、戦後民主主義というものは、実は戦時中にあったものの裏返しにすぎないのだということを考えたのです。戦後というのは、日本の価値観が完全にひっくり返るわけです。戦後は民主主義、戦時中は全体主義です。楢円の中心は一つです。しかし焦点は二つある。私たちの生きている社会は、焦点が二つある楢円のようなものではないかということです。しかし人間というものは、いつも真円にあこがれる。そして、焦点をどんどん近づけて真円になると、一方が一方の背後に隠れるのです。二つ目の焦点がつくっていた真円の上にもう一つの真円が重なって、一つだけしか見えなくなる。これが現代社会です。しかし、その裏側には必ずそれとは別の焦点があるのだということなのです。

■贈与経済ということ

マルセル・モースは『贈与論』で、マオリ族の贈与システムには、人から何かをもらった、その品と同価値のものを直接その人に返礼してはいけないというルールがあることを述べています。同価値のものを返礼すると、贈与経済ではなく、今の我々の経済である交換経済になるのです。現代社会のモラルは貨幣による等価交換ですが、も

らったものと同価値のものを返してはならないというのが部族社会の贈与交換のモラルです。なぜ同価値のものを返してはいけないかというと、それが縁の切断を意味することになるからです。縁を結んでいくためには、常にどちらかがどちらかに何かを負っているという状態をつくる必要があります。等価交換は、関係の精算を必要とするモデルなので、同価値のものを返すということは相手との関係を切るということになります。部族間でそれをするとは、相手との関係性を断ち切って敵対関係に入ること、つまり戦争を意味するのです。

今の社会においても、例えば介護の問題だとか、医療、教育、宗教、こういった分野は等価交換の経済だけでなく、贈与の経済で全体に分け与えられるというような指向性をもった仕組みによって支えられているものだろうと私は思います。

つまり、これは花田清輝が言った楢円幻想なのです。我々の社会は、一見、貨幣経済によって完全に蹂躪された社会に見えるけれど、実はそれを背後で支えているのは、贈与的な経済なのだということです。この贈与的な経済をもう一回、目に見える場所に引きずり出して、それを利用しなければ、この右肩下がり時代にはやっていけないということなのです。おそらくこれから私たちが直面するのは大介護時代だろうと思いますが、この大介護時代は、相互扶助的な地域連携システム、つまりは贈与的な全体給付システムを立ち上げていかない限り、乗り越えることができないのではないのでしょうか。

(文責：親鸞仏教センター)



研究会の様子

※平川氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第41号(2019年12月1日発行予定)に掲載予定です。



「他力門哲学骸骨試稿」 に学ぶ

——研究の方向性——

西本 祐攝 氏

2018年6月15日、大谷大学の西本祐攝氏をお招きし、「他力門哲学骸骨試稿」に学ぶ—研究の方向性—というテーマで清沢満之研究会を開催した。西本氏はこれまで、真宗学の立場から清沢満之を学ばれ、特に清沢が結核療養中であった、「石水期」の思索に注目した研究を進めてこられた。親鸞仏教センターの清沢満之研究会では、現在、「他力門哲学骸骨試稿」（以下「試稿」と略）をテキストとしているが、その時期の清沢の人生と思索に深く学んだ西本氏から、この書を読むための重要な視座をご提示いただいた。本研究会では、まずは『宗教哲学骸骨』（以下『骸骨』）の議論に遡って「試稿」の基本的枠組みが確認され、さらに「在床懺悔録」や『保養雑記』といった資料から、当時の清沢が抱いていた宗教的な課題が確かめられた。以下ではその研究会の一部を紹介する。

（親鸞仏教センター研究員 長谷川 琢哉）

■「他力門哲学骸骨試稿」との接点

「試稿」と私自身の研究課題の接点は、『精神界』に掲載された諸論考に見られる「現在安住」の問題にあります。「精神主義」の要は現在安住であると言われるわけですが、その背景には親鸞の現生正定聚の考えがあるとされてきました。しかし、現在安住ということで清沢先生は本当のところ何を言おうとしていたのか。それを清沢先生の思索と人生から跡づけるような研究はありませんでした。私自身はそれを確かめたいと思い、研究を始めました。そしてそのためには清沢先生が親鸞をどのように学んだのかということをも明らかにする



西本 祐攝（にしもと ゆうせつ）氏

大谷大学短期大学部専任講師

1975年生まれ。2004年大谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。2007年大谷大学にて博士（文学）取得。大谷大学任期制助手、大谷大学非常勤講師を経て、2007年大谷大学短期大学部助教に着任、2011年大谷大学短期大学部専任講師。現在に至る。研究領域は、真宗学、親鸞の思想研究、清沢満之の研究。

共著に『清沢満之と近代日本』（法藏館、2016年）。論文に「『現在安住』についての一考察」（『真宗教学研究』第24号、真宗教学学会）、「清沢満之における『歎異抄』の受容とその背景」（『真宗研究』第50輯、真宗連合学会）、「石水期・清沢満之における「現生正定聚論」の究明（上）（下）—清沢満之における「現在安住」の思想的背景—」（『親鸞教学』第91号、同95号、大谷大学真宗学会）、「清沢満之と「宗教」」（『真宗総合研究所紀要』第32号、大谷大学真宗総合研究所）、「大谷大学編『清沢満之全集』編纂の背景と課題」（『真宗総合研究所研究紀要』第35号、大谷大学真宗総合研究所）など多数。

必要が生じ、そこから「在床懺悔録」や「試稿」を読み始めました。またそれらの前提となっている『骸骨』にも遡ることとなりました。

■『宗教哲学骸骨』における有限無限

「試稿」に「安心立命ハ無限ノ境遇ニ対シテ精神ヲ適合スルニアル」とありますが、この一節を理解するには清沢先生の思想のキーワードである「無限」について確かめなければなりません。無限ということ清沢先生はどのように規定しているのでしょうか。『骸骨』では、それは「有機組織」ということで押さえられます。つまり、無数の有限が集まって無限の一体をなし、その全体が有機組織を形成しているという考えです。万有が相依

相対^{そうたい}の関係にあるという様体が無限と呼ばれるわけです。そしてそこから、その中の一個の有限存在を「主」とした場合、他の万有のすべてがそれに対する「伴」となるという、「主伴互具^{しゅばんこぐ}」の関係が見出^いされます。『骸骨』では、この主伴互具の関係を覚了^いすることが宗教の要であるとされ、その目覚めの主体となるものが「靈魂」として論じられています。また、『骸骨』では、「浄土」というものは、この主伴互具の関係に目覚めた状態を比説したものであるとも言われています。しかしそれで終わりではありません。このような関係に目覚めた主体には、万有の痛みを自分の痛みとして感じるといった、新たな生き方が開かれていくこととなります。以上が、清沢先生の思想の基本的な枠組みとなるものです。

■ 死生の問題

明治27年4月20日に、清沢先生は肺結核の診断を受け、その翌日から日記（『保養雑記』）をつけ始めます。ここに一つの転機を見ることができるとか思います。特にこの時期、人間の死生についての思索がなされるようになりました。清沢先生の『保養雑記』の自筆原稿が大谷大学の博物館に所蔵されていることが最近わかったのですが、それを見ますと「宗教は死生の問題について安心立命せしむるもの也」という有名な表現が書き直されたものであることがわかりました。その一節は、当初「宗教は死生の問題について説教するもの也」となっていたようです。それが書き直されたのはおそらく、澤柳政太郎から日高真実の死を知らされた書簡を受け取った9月9日のことであったと推測できます。いずれにせよ、このころから始まった課題が、「試稿」に受け継がれていきます。

■ 「在床懺悔録」の重要性

「在床懺悔録」では、現生正定聚を主伴互具の関係に目覚めることとしてとらえています。しかしそれでも人間には、それぞれが個々別々のものであるという考えが染み付いているため、邪念が生じてしまいます。つまり現生正定聚というのは、迷妄存在でありながらも主伴互具の関係に生きて

いることに目覚めた在り方を指すわけですが、しかし同時に、私たちは依然として、有限孤立の思念から逃れることができない存在でもあるわけです。この「在床懺悔録」での確かめが、「試稿」でさらに深く考えられていくのではないかと私は考えています。「在床懺悔録」があったからこそ、「試稿」における独自の思索もあったのではないかとということです。

■ 「他力門哲学骸骨試稿」の主題

『骸骨』では有限無限の関係は一体としてとらえられていましたが、「試稿」では、有限の外に無限があるという別の思索がなされており、それが「根本の撞着^{どうちやく}」ということで押さえられます。そしてこのことが自力か他力かという宗教の問題として論じられていくわけですが、しかしここで重要なのは、有限者のほうから無限に目覚めていこうとしても、決して無限を明らかにし尽くすことはできないということです。ここで問われているのは、自力他力の単なる矛盾ではなく、自害害他からどうしても逃れられない無明存在としての私たちの在り方ではないでしょうか。つまり、主伴互具の関係性に目覚めることができない私たちが、どのようにすれば教えを聞くことができるのか。清沢先生が「試稿」を書いたことの意味は、ここにあったのではないかと私は考えています。

（文責：親鸞仏教センター）



研究会の様子

※西本氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第41号（2019年12月1日発行予定）に掲載予定です。

英訳『教行信証』研究会報告⑭

『教行信証』「証巻」における 法身の「意志」問題 —鈴木大拙の解釈を中心に— ステファン P. グレイス 氏



ステファン P. グレイス 氏

早稲田大学大学院非常勤講師/大正大学非常勤講師

ニュージーランド出身。カンタベリー大学日本語・日本文化学部（ニュージーランド）卒業、駒澤大学大学院人文科学研究科博士課程修了。学位は博士（文学）。

研究領域は仏教、近代日本思想など。2012年から2015年までの3年間にわたって親鸞仏教センター嘱託研究員として、英訳『教行信証』（鈴木大拙著）の現代日本語訳版の刊行などにご尽力をいただいていた。

現在は、早稲田大学大学院非常勤講師（担当科目は「Introduction to Japanese Thought and Religion」）、大正大学非常勤講師（担当科目は「英語で学ぶ仏教」）として活躍されている。

論文に『鈴木大拙の研究：現代「日本」仏教の自己認識とその「西洋」に対する表現』（2014年）、「The Political Context of D.T. Suzuki's Early Life（鈴木大拙の少年時代の政治的な背景について）」（『THE EASTERN BUDDHIST 2016』Vol.47, No.2、東方仏教徒協会、2019年）などがある。

英訳『教行信証』研究会では、2018年11月20日にステファンP.グレイス氏をお迎えして講義をいただいた。当日は「『教行信証』「証巻」における法身の「意志」問題—鈴木大拙の解釈を中心に—」と題されて、鈴木大拙の『教行信証』についての思想が語られた。2015年まで、当センターの研究員であった氏との再会は、大拙の「法身」理解をめぐる、大切な議論の場となった。ここにその一端を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 田村 晃徳）



■ シカゴ万国宗教会議

1893年にシカゴで「万国宗教会議」が開催されました。ここには鈴木大拙や、その師匠である釈宗演も参加しました。清沢満之の著作も紹介された大会でした。このイベントが大切なのです。このころは、ちょうど明治時代の廃仏毀釈の影響を仏教界は受けていました。仏教がもしかしたら無くなるのではないかと、という心配もあったのです。日本仏教にとっては、非常に大変な時期だったのです。

当時の西洋は東洋の宗教を悪く見ていました。その最大のポイントが「ニヒリズム」でした。覚ったら無であるというふうに、西洋の学者はインド仏教を見ていたのです。そのように、仏教は世界的な批判を受けていたのです。

もちろん、仏教界もそれは感じていました。ですから、仏教をアピールしなければいけないと思うわけです。国内では廃仏毀釈があり、国内外から厳しい批判を受けていましたから、なおのこと仏教を美しく見せたいという思いは強かったのではないのでしょうか。そこには政治的な意味合いもあったと私は思うのです。

■ 対西洋としての「法身」

そこで目をつけたのが“trikāya”、つまり「法身」というアイデアでした。研究によりますと、この法身という概念が1893年、つまり「万国宗教会議」以前は、そこまで注目されたり、語られることはなかったそうです。つまり、仏教を説明する際に「法身」はあまり用いられなかったのです。

実は「万国宗教会議」で一冊の本が出されました。“Outlines of the Mahāyāna as Taught by Buddha”という本でした。それは浄土宗の黒田真洞という方が書かれた本です。西洋の学者の中には、日本仏教が大乗仏教ですから、釈尊の教えとは遠く離れていると考えている人が多かったのです。宗教としては正当ではないと思われていたの

で、「ブッダが説かれた教えとしての大乗仏教」というタイトルにしたのかもしれませんが。

この本を読んでみて気づくことがあります。それは、本の内容が大拙の“Outlines of Mahāyāna Buddhism”、つまり『大乗仏教概論』とそっくりなのです。「業」に対する考え方、また「法身」の考え方などが、とても似ています。ですから、大拙がこの本を読んでいないとは、私は考えられません。あるいは、大拙がもしかしたら、この本に関わっていたかもしれませんが。証拠はありませんが、可能性はあると思います。

大拙の法身理解の背景には、やはり西洋の仏教に対する理解、つまりニヒリズムに異論をとねえなかったことがあるのだらうと思います。西洋人にわかりやすく日本仏教を説明するには、キリスト教にもあるような汎神論はんしんろん的な理論を用いる方法もあったかもしれませんが、彼は法身を用いました。そして大拙が『大乗仏教概論』を書いて以降、この本の理解が後の彼の仏教理解の基盤となるのです。その他の著作は、この『大乗仏教概論』に対する注釈書のようなものなのです。

■ 法身と意志

具体的に大拙がどのように法身について見ていたか。それを考えるときに、やはり「法身には意志がある」というのが大切ですね。つまり、法身に意志があるのならば、キリスト教の神とどのように異なるのか、ということが大問題となります。

The Dharmakāya... is capable of willing and reflecting, or to use Buddhist phraseology, it is Karuṇā (love) and Bodhi (intelligence), and not the mere state of being.

これは大拙の“Outlines of Mahāyāna Buddhism”からの文章です。やはりこの英文で注意されるのはwillですね。ここにはwillingと書いてありますが、つまり意志ひんぼんです。頻繁に出てきますが、日本語の意志よりも少し意味が広いように思います。

ここでは法身がnot the mere state of being、つまり「ただの生命体ではない」と書いてあります。やはり、法身が何かをするのです。人をコントロールするような感じになるのです。またはreflectingとありますが日本語で直訳すれば「反省」といった意味ですね。つまり法身が何かについて考えたりするのです。何があったのかについ

て、考えていけるのです。このような点においては、やはりキリスト教の神と非常に近い理解がされていると思います。

■ 法身とは何か

大拙の法身の定義について確認してみましょう。1973年版の英訳『教行信証』には、たくさんの注釈はぶこが施されています。その中に、法身についての注釈もあります。私はそこに晩年の大拙の法身理解があると思っていたのですが、そうではありませんでした。それは後に、編集者によって加えられたものだったのです。そして、その注釈のもととなったのが実は『大乗仏教概論』だったのです。

それでは英文を確認してみましょう。

The Dharmakāya is therefore a person whose bodily or organic or material expression is this universe, Dharma.

と書いてあります。ここではDharmakāyaという人間が万物として現れるということです。このようにpersonを用いてしまうと、ますますキリスト教の神と似ているような感じがしてきます。

私は大拙が考えていた「意志」とは「力」や「方向性」というふうに解釈すればよいのではないかと考えています。法身が我々の心にはたらいて、智慧を探させる。そしてさらに慈悲を起こさせる。これらが法身の力です。大拙はそれを浄土真宗の往相廻向と還相廻向なども念頭に置きながら考えていたのかも知れません。

(文責：親鸞仏教センター)



研究会の様子

※グレイス氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第42号(2020年6月1日発行予定)に掲載予定です。

『『聖典』の試訳』 『尊号真像銘文』研究会を 再開するにあたって

親鸞仏教センター嘱託研究員 菊池 弘宣

当センターではこれまで、『『聖典』の試訳』と題して、親鸞聖人の教え・^{しやうぎやう}聖教の^{こころ}を、現代語で表現することを試みてきた。『歎異抄』、『唯信鈔文意』の後を受けた、『尊号真像銘文』研究会は、2011年6月から2014年6月まで、内記洸元研究員が担当し、「本巻」を読了した。研究会は、2018年4月より再開し、現在、「末巻」を読み進めている。ここでは、再開にあたって、受け継がれてきた願いを報告する。



■『尊号真像銘文』の位置

『尊号真像銘文』とは、親鸞聖人の最晩年の著作である。当時、本尊として掲げられていた阿弥陀如来の名号（＝尊号）や祖師方の絵像（＝真像）に付された讃嘆の文（＝銘文）を、親鸞聖人が、カナ文字交じりの文で、易しく解説したものである。「諸仏方が、讃嘆された言葉と共に、世界に散っている。それを親鸞聖人が解説される。それは、時間・空間を超えて見渡されるような「親鸞聖人のコスモス（宇宙観）」である」という、研究会で聞いた言葉が深く心に残っている。

伝わっているものには、巻末に「愚禿親鸞八十三歳 書写之」という識語^{しきご}がある「略本」と、「愚禿親鸞八十六歳 書之」と記されている「広本」との二種類がある。



その、親鸞聖人の83歳から86歳における、創作意欲の背景にあるのは、長男・善鸞義絶事件に関連する、関東教団における揺らぎであり、その念仏の^{さん}僧伽^がに対する責任感覚であると言われている。

課題的に、つづめて言えば、親鸞聖人が、関東の門弟における信心の確立を念じ、法然上人の御弟子方が示す^{へんぼう}変貌^{なげ}・異義を歎き、師・法然上人の恩徳に謝念を^{きざ}捧げつつ、『選択集』を顕彰するかたちで、自身における信心の普遍性を確かめ直している。それは親鸞聖人が、『尊号真像銘文』の結びに、自身の『正信偈』の文の二十句を置き、正しく定まった信心を、自らの解説をもって表明しているのと、課題的には、通底しているといえるのではないか。

そして、『尊号真像銘文』が、『唯信鈔文意』や『一念多念文意』と同様に、漢字のみではなく、カナ文字交じりで記された「^{かな}仮名聖教」であることから、それは、関東の門弟方に向けられた、メッセージという位置があるにちがいない。

『唯信鈔文意』の末尾には、「いなかのひとびとの、文字のころもしらず、あさましき愚痴きままりなきゆえに、やすくころえさせんとて、おなじことを、たびたびとりかえしとりかえし、かきつけたり」（『真宗聖典』559頁）とある。つまり、『尊号真像銘文』を含む「^{かな}仮名聖教」とは、親鸞聖人が、「関東の門弟方」に、難解な漢文で伝え

られてきた聖教のころを、易しく^{りょうかい}領解させようと願って、煩惱の身に寄り添いながら、繰り返し繰り返し、書き記した書物であると受けとめることができる。

『尊号真像銘文』に通ずるものに、親鸞聖人の真像であり、銘文が記されている、「安城の御影」^{あんじょうごえい}があげられる。その銘文とは、『無量寿経』の三文と、天親菩薩の『浄土論』の文を置き、『正信偈』の文の二十句で結ぶという、『尊号真像銘文』の構成と合致するものである。またそれは、三河地方の、縁ある地域の道場教化^{にん}を荷ったと言われている。

そして現在でも、「尊号・真像・銘文」は、寺院や道場など、浄土真宗に縁のある場を開く^{もとい}、基になっていると感じる。それは、単に個人にとどまらない、「場を開く」という特性があるのだと思う。それが、現代とどう切り結ばれるのか。そこに、我々が見据えるべき問題と課題がある。

■『聖典』の試訳の趣旨・「現代語化」の願い

『聖典』の試訳とは、親鸞聖人の教え・聖教のころを、現代語で表現する試みである。それは、「現代人が、『聖典』の言葉に親しめるように、「教えの言葉（原典）」に触れる契機となるように」という趣旨のもとに行われてきた。先に述べた『唯信鈔文意』に示される、「やすくころえさせんとて、おなじことを、たびたびとりかえしとりかえし、かきつけたり」という、親鸞聖人の姿勢を仰ぎ、鏡とするものである。

その「現代人」といっても、それは、直面する現実生活からの問いかけと、親鸞聖人の教えとしての呼びかけを受けて、応答していくこの私自身のことであり、自分自身を外して他ではない。つまりは、現に今、自身の抱える苦悩から本当に解放されていくような、「教えの言葉」に出遇う^あということこそが、根本の願いである。またそれ

が、「現代に生きる人々」に本当に通じていく、普遍性のあるものなのか否かを、表現して確かめていくのである。

そもそも、「現代人」にとっての躓^{つまず}きは、種々の理由で、原文を読めないことにあると思う。また、逐語訳的な現代語訳を読んでもよくわからない、苦悩から本当に解放されることがない、という問題もある。

この研究会では、原文を繰り返し読んで、意を取りつつも、単に逐語訳だけをするというのではない。親鸞聖人の思想・信念の核心をたずねあて、「現代に生きる人々」に届くように、読んでわかるようなものを作り出すという、「現代語化」を推し進めている。それはまた、親鸞聖人における信心が何のためのものであるかを確かめ、訴えかける試みでもある。

研究会は時に、一語を検討するの^{かんかんがく}に侃々諤々の議論で、一回の時間を使い切ることもある。自分一人の力では、言葉一つも、到底生み出せるものではないと痛感させられている。周りの方々からご指摘をいただき続けて、悪戦苦闘する中で、ようやく、やっと気づかされていく。そのようにして、親鸞聖人のもとへと導かれていくように感じている。場があることのありがたさを感じる。

(文責：親鸞仏教センター)



研究会の様子

近現代『教行信証』研究検証プロジェクト 研究紀要 第2号 発刊!

価格 1,000円 (送料込)

発行：2019年 3月 1日

《研究会報告》

『教行信証』研究をめぐる諸課題 …………… 三木 彰円

《研究論文》

真宗教学史の転軸点

—— 相伝教学批判たる香月院深励の還相回向論—— …… 藤原 智

『教行信証』における親鸞の学的営為

—— 題号の「顕」と「文類」を通して—— …………… 青柳 英司

「三願転入」論の波紋

—— 曾我量深から京都学派、現代へ—— …………… 名和 達宣



■親鸞仏教センター、教学研究部、大谷大学真宗総合研究所東京分室での三機関共同研究事業「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト」における研究成果第二弾。『教行信証』に顕された「時代の闇を破るべき真実の道理」を現代に発信するという視点で展開している研究プロジェクトの成果を逐時公開しております。

■お申込みとお問い合わせ

親鸞仏教センター
〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11
TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901
E-mail shinran@higashihonganji.or.jp

リレーコラム

「近現代の真宗をめぐる人々」第4回 (上杉慧岳 [1892~1972])

伝統的な真宗学を頭ごなしに否定するのは、それ自体が一つの思考の枠組みに囚われていると思うが、ただ伝統的な真宗学が強固な思考の枠組みを提供し、それが安易に継承されていったのもまた、否定し得ない事実であろう。近代において従来の枠組みを飛び越え、再度、祖師の言葉と向き合う学が真宗学で始動したわけであるが、それは證空を祖とする西山教学にも言える。大谷派におけるその草分け的存在が上杉文秀の長男、上杉慧岳である。

上杉は、「当時我が一家の老大家御講師方の『選択集』の講録など読むと、[...] 真宗一家のみが廃立の正意をとる、西山鎮西などは傍正位や助正位やなぞとけなしおとしめる傾向がある、これは大なる間違いのもと、……」（『恩師住田先生と西山義研究』、『同朋学報』14・15号合併号〔1967〕）などと問題提起している。また上杉は、当時西山・真宗の両研究者が行き来して西山教学について活発な議論をしていたことを伝える証言者でもある（現西山浄土宗・三浦貫道、浄土真宗本願寺派・杉紫朗などとの交流があったと言う。同上）。例えば、凡夫における「行」の実現の問題など互いに批判し合うところもある西山・真宗ではあるが、両教義間を行き来する真摯な批判から初めて立体的に明かされる浄土教の本質は確かにある。そのためには、互いを安易な枠組みにはめ込まないことが肝要であり、上杉の姿勢を見習いたい。（中村）

行事日程のご案内

■親鸞思想の解明

日時：2019年 3月 1日（金）18時30分～20時30分
4月 休講
会場：東京国際フォーラム ガラス棟（G棟）

■ご命日のつどい

日時：2019年 3月 8日（金）10時～11時30分
2019年 4月 12日（金）10時～11時30分
2019年 5月 10日（金）10時～11時30分
会場：親鸞仏教センター仏間
上記ともに、事前申込み不要・無料です。

■あしがき

まもなく、6年とか3年という決められた年月を経て迎える卒業の時季である。同時に入学や入社の日々の季節である。

当センターの研究者も任期があり、任期が満了する者は、次の場を探し求めなければならない。研究者にとっては卒業ということはないわけだけれど、継続的に研究を続けることができる場はなかなかそう簡単には見つからないのが現状なのである。とは言っても周りの環境というか、家族ももちろん家族の理解や助けが必要不可欠なのはもちろんのことであるし、また寺院子弟の場合は自坊を離れてということで、住職の了解も必要になってくる。

センターは若手の研究者に一応3年という短いであろう場で自分の課題を深めてもらうとともに、センターの願いである親鸞思想の発信の一端を担ってもらうわけであるが、毎回この節目の人に頭を悩ますのも事実なのである。継続性ということも見えてきた一つの課題である。（橘）